

「ヒトから人へ、人からヒトへ」——今回の特集は、成功裡に終わった第67回大会の報告である。大会実行委員長の感謝の言葉とともに、4名のレポーターの記事が掲載されている。子どもを取り巻く環境の変化や、子育てをめぐる環境の変化、保育制度改革など、激動の状況にあって、子どもをめぐるつながりの大切さをこれらの記事を通して改めて考えてみたい。

第67回大会を終えて

第67回大会実行委員長 大方 美香

全ての皆様に感謝御礼申し上げます。2014年5月17日(土)・18日(日)一般社団法人日本保育学会第67回大会は近畿ブロック主催のもと、大阪総合保育大学・大阪城南女子短期大学を会場として開催されました。昨今の自然現象・社会情勢を鑑みる時、まずは開催期間中天候に恵まれ、無事に終えることができましたことを何より嬉しく実行委員会一同ほっと胸をなでおろしております。

前日16日(金)には、大阪府内10箇所ですべて同時に公開保育(幼稚園・連携型・保育園・センター)を開催いたしました。大阪府・大阪市・大阪府教育委員会・大阪市教育委員会・大阪府私立幼稚園連盟・大阪市私立幼稚園連盟・大阪府私立保育園連盟などのご後援・ご協力下さいました地域連携が実ったことです。

開催の依頼を受けましたのは、ちょうど2年前の第65回大会の開催期間中でした。準備期間がまる2年しかない中、大学・短大の教授会は全学体制のご承認を下さり、城南学園全体の協力の下、小さな大学、新しい大学に出来る可能性を試行錯誤しながらの準備でした。振り返ります時、近畿ブロック評議員の先生方、公募による若手の先生方、学内運営委員の先生方が共に実行委員会として毎月夜遅くに集まって議論し準備をしてきた日々は、人と人とが出会い繋がる日々であったと感慨深いです。さらに、最後の2ヶ月は、城南学園(幼・小・中・高校等含)全体の施設設備を使用し、教職員・学生が一丸となって気持ちよく役割を果たすという底力があったからこそ、3000名近い方々をお迎えし、混乱なく終えられたことを皆様にご報告させていただきます。当日は、近畿ブロック理事や学長自ら早朝より教職員や学生と同じ緑のTシャツを着てご協力・ご尽力下さいました。物心両面からの学園理事長・学長のご理解なくしてはなしえなかったことと思います。開催にあたり、開催までの登録システム作りから始まる様々な準備態勢や各事務・業者との連携は日常業務・授業といった校務をこなしながらの毎日です。職員・学生へは学会とは何かということからの始まりです。若手の運営委員が新しいアイデア

を出しながら頑張ってくれました。しかしながら、それは無償の働きや人への思いだけではいけないことも今後の課題ではないかと思えます。会員の皆様方のご理解・ご協力をお願い申し上げます。行き届かないところはどうぞご放念くださいますようお願い申し上げます。

大会テーマは「ヒトから人へ、人からヒトへ」でした。ヒトから人への文化の継承や人と人との関係性に焦点をあて、子どもの背後にある関係性に気づいた子ども理解に繋がっていったらとの願いがありました。「ヒューマニティーに溢れる大会であった。」とのお言葉をいただき感無量です。

今大会は、関西発の大会にと関西にゆかりのある皆様にご講演やシンポジウムをご依頼いたしました。大会記念講演は子どもホスピスの鍋谷まこと先生にご講演いただきました。特別講演はコシノヒロコ様に、馬場耕一郎様(厚生労働省)には保育行政についてご講演いただきました。絵本ライブ、大阪市立愛珠幼稚園・愛染橋保育園の歴史に焦点をあてたシンポジウム、長居公園で児童を対象にされている、アートを通じた学習支援活動を取りあげたシンポジウムなど話題に富み、どの会場も一杯でした。乳児保育は、総合保育研究所の継続研究からテーマを得て、アメリカのメアリー・ミクマレン先生を招聘いたしました。第67回大会が、近畿地区として開催場所提供・運営に終始するだけではなく、乳児保育や保育学を皆様と共に学び考える契機になればと願いました。

また、韓国嬰幼兒保育学会会長講演、国際シンポジウム、各種委員会企画のシンポジウム・ワークショップ、自主シンポジウム、口頭発表、ポスター発表、ビデオ実践研究発表なども予定通り終えることができました。皆様のご協力に心より感謝御礼申し上げます。

実行委員会企画絵本ライブ

ヒトから人へ 人からヒトへ
絵本からエホンへ エホンから絵本へ

塩崎 美穂

長谷川義史さんの絵本ライブは、バリバリの大阪弁。絵本のおもしろさはもちろん、人が生きていくことの切なさや平和に暮らすことの尊さのようなことがじんわりと感じられた。会場全体が終始笑ったり泣いたり、多くの学びが共有される貴重な時間だった。

長谷川さんは「シャイなおとうちゃんが気楽に読める絵本」「どう見ても体に悪そうな駄菓子のような絵本」が創りたいとおっしゃっていた。なるほど。たしかに長谷川さんの絵本は、近づき難い高尚な世界には目もくれず、我々の素朴な日常をこそしっかり捉えている。深酒や夜更かしのような身体に悪そうなことに惹かれてしま

う大人もいれば、高級和菓子や洋菓子だけではなく着色料過多の駄菓子が無性に食べたくなってしまう子どももいる。こうした「人」のもつ「どうしようもないことが好きになってしまう」わけのわからない願いへの共感（というか哀愁）が、長谷川さんの物語や絵の基底には流れているように思う。

長谷川さんの絵本を読んだときのそこはかとない安心感は、ヒトという動物が他の動物とは違い、「本能だけでは生きていけないしんどさ」を抱えた生き物であり、矛盾だらけの存在だということを積極的に受け止める諦念や優しさにあるのだと改めて気づかされた。人は弱い、でもだからこそ愛おしい。ヒトから人になってきた私たちが得た人間らしさとは何なのか、ふと考えさせられた。

加えて「小手先ではなく、あほみたいな本に真剣に取り組む」というちょっとフザケた感じの自画像を示された長谷川さんが、「『こんな自分がですよ、立て続けに二冊重いメッセージをこめた絵本を出版している』という話しもされた。「核はいけない」と「平和が大切」という二冊。

チェルノブイリ原発事故後の子どもの育ちをつぶさに診てきた鎌田實医師に提案され、鎌田さんと長谷川さんのコラボで福島原発事故後の苦しみを『ほうれんそうはなっています』（鎌田實・文／長谷川義史・絵）に描いている。「いただきます」とかつてのように喜んで食べてもらえなくなったほうれんそうの痛々しい姿から、原発（エネルギー資源）を我が物にしようとしてきた人間の愚かさが浮かび上がる。

長谷川さんは原発被害というむずかしいテーマを前に逃げ出したいほどに絵が描けなかった時、「風評被害」というのはどう考えたらいいのか鎌田さんにたずねたことがあったという。すると鎌田さんは、放射能が今の状況にあるとき「医師の立場で安全だといえない」とおっしゃられたそうだ。どんな理由があろうと人の命が奪われることがあってはならない。「あかんことはあかん」。理屈でなくてダメなことがある。そのことを伝える必要があると覚悟した。そんな決意が制作の裏にあったことを教えていただいた。人はできることを何でもやっていたわけではない。「できること」と「していいこと」はちがう。地球に暮らすヒトとして、してはいけないことをしない決意を、この危ない時代には確認する必要がある。「なんとかしたい」思いは皆同じだと、改めて感じる絵本ライブだった。

●Profile

塩崎 美穂（しおざき みほ）
尚絅大学短期大学部 准教授

教育が命をつなぐ営みであるならば、現在の公教育とは何なのか。すべての子どもがしあわせになる教育・保育制度を考えたいと思っている。公私の境目や人間の自由などについて各地域の日常実践を歴史的に比較し、意識しづらい社会に織り込まれた子育て文化のようなものを探り出すのが当面の課題。

自主シンポジウムSI841E デザイナーと保育者の協働による 乳児の表現活動への探求

福田 泰雅

このシンポジウムでは、多様な表現言語を有するデザイナーの保育実践参加による保育の変化と可能性について討論された。

司会の刑部育子氏より企画趣旨と2歳児との活動が語られた。それによるとデザイナーが子どもたちと関わる際には、生活の場に溶け込むよう慎重に出会いを準備することから開始され、その結果、子どもにとってデザイナーは保育者や仲間の一人として溶け込み、表現活動と過程の記録、展示などが繰り返されていった。これにより今まで見られなかった子どもの姿が見られ、デザイナーが関わった反応は、保育者の予想を超える、ハプニングを楽しむものであったと述べた。

植村朋弘氏からは、デザイナーの専門性について説明があり、ものを通して未来をデザインすることに幼児教育との共通性を感じ、幼児教育のなかに未来の学びを切り開くヒントがあると考えたことが動機であったと述べられた。

素材は個別活動や関係性を生み出す可能性を想定して準備され、子どもは素材で遊び込む中で、言葉として表現できない未知の世界を表現しており、そこに自己肯定感、他者の受容、多様性、挑戦（創造性）、探求心（積極性、好奇心）などが自己の経験として広がり深まっていた。しかし、植村氏は保育者が素材そのものの制約と可能性を見極め、ねらいを持ち、発達段階や表現や内容に従って素材を与える必要があると述べた。

保育者として中澤智子氏より、保育者は従来素材の可能性を求め、既成の使い方を越えた出会いをしたいと望んでいたと指摘があり、従来の保育の中で扱ったことのない素材を使うことで、子どもたちは全身で素材とかかわり、手や心が動き、表出や表現が深まり、心躍らせた経験であったが、準備そのものは保育者の仕事であることを再認識したと述べた。

私市和子氏より、保育者は遊びのつながりに配慮することで、面白い遊びの展開が可能となり、保育者ではない視点を学ぶことができた。また、作品の展示により子どもも含めて保育に関わる者すべてが振り返る機会となり、個々の内面を語り合い、日々の生活、遊びの経験がつながることがわかったと述べた。

刑部育子氏からは、作品展を開催し、保護者対象の語り合いによって保護者の理解を深めた過程について説明があった。デザイナーと保育者の協働により、保

育者自身が保育の可能性に気づかされており、デザイナーは、表現活動の過程やそれを可視化するドキュメンテーションに寄与し、表現活動の探究を支える存在となったと述べた。

指定討論者の佐伯胖氏より、大切なことは日常の中に素材があることへの気づきや素材化、そして生活に溶け込んだアートを目指すことではないかと本質理解への視点が述べられた。保育者が子どもと生活し子どもの驚きを一緒に驚けること、アーティストが素敵を見つける様子を学ぶことが大切と述べた。

佐伯氏は、近年幼児教育は学校教育の準備を自覚する傾向にあるが、アートの生活（日常が違って見える）を実践し、身近な物で素敵な物を創造すること、驚くセンスや可能性を身に付けて、子どもが面白いと思うもので反撃してほしいとまとめた。

●Profile

福田 泰雅（ふくだ たいが）
鳥取県東伯郡琴浦町社会福祉法人赤碕保育園 園長
アイデンティティの形成と表現について。および個人の物語の形成とプロジェクト保育の関係について関心を持っている。

分科会 口頭発表 I

(3) 保育制度・保育行財政など I

古賀 松香

現在、保育界は制度上の大きな転換期を迎えている。今大会の口頭発表 I (3) は、子ども子育て新制度についての4名の論客による問題提起であった。会場には多くの参加者が詰めかけ、廊下に溢れた人たちも用意された分厚い資料を手に熱心に聞き入っていた。

まず、大宮勇雄氏（福島大学）は、新制度における「保育」「教育」論議について、法律上の定義を整理し、幼児期の「教育」は小学校との近接こそ教育という教育観がみられること、それに対して「保育」には学校としての教育が含まれていない問題を指摘し、論議の貧困と評された。この定義に至った経緯を検討し、教育論として教育と保育が論議されず法制上の取り扱いとして整理されたことの問題や、保育が小学校以上の教育に貢献するかどうかで評価されることの危惧について述べられた。

次に杉山隆一氏（佛教大学）は、①教育・保育の必要性の事由と必要量の認定の内容、②教育・保育の供給組織と運営主体の多様性と教育・保育条件、③障害児や育児休業中の子どもの保育保障の仕組みという3点から検討を行っていた。その中で、就労中心に保育

の必要性の要件構成がなされていることから、子どもの障害による保育の必要性の認定や育児休業による保育の継続について課題があること等が説明された。また、多様な提供主体の認定要件が異なるため、保育士の割合等で保育の条件格差が生じる制度的仕組みとなっている問題が指摘され、保育の平等性の確保が課題であるとされた。

続いて逆井直紀氏（保育研究所）は、市町村の保育の実施義務を規定した児童福祉法24条1項と、保育所以外の施設や事業の直接契約方式を規定した24条2項が並立することで生じている、制度の複雑さ及び矛盾点を指摘した。市町村責任による入所決定／利用者と事業者による直接契約、市町村による保育料徴収／利用者補助と代理受領（徴収は事業者）という1項と2項の並立と、利用調整という手続きにみられる法的問題性が説明された。権利保障の観点から、24条1項の復活を評価しながらも、具体的な利用手続き等の根拠が未だ内閣府令等のみで政令で示されていないことから、今後も1項の意義についての検討を行うべきであるとされた。

最後に、村山祐一氏（保育研究所）の発表では、幼保連携型認定こども園制度に至る経緯について第1次安倍内閣からとり、新制度の公定価格問題までを取り上げた幅広い問題提起があった。特に、新制度においては児童福祉機能の縮小という問題が見られることや、公定価格の問題に関して保育保障の観点から適正な経費算出のあり方を研究的に明らかにすべきだと述べられた。

多様な問題性をはらんだ新制度は、今後の保育実践にどう影響を与えるのか。幼保の一体化ではなく、保育と教育の分離が制度論上で行われているのに対して、日本保育学会はどのような理念的一体化を創っていけるのか。複雑化する実践現場の問題様相に対し、いかなる研究によって貢献するのか。日本保育学会の果たすべき役割は大きいと感じた。

●Profile

古賀 松香（こが まつか）
京都教育大学教育学部 准教授
研究テーマは保育者の専門性と実践の質。
子どもに沿った保育を創るための条件にも関心がある。

日本保育学会企画シンポジウムⅢ 編集常任委員会企画ワークショップ 保育学の論文作成にどう取り組むか4

平野 麻衣子

本シンポジウムは、若手の保育学研究者の論文作成の取り組みから、実践での問いをどのように研究に結びつけるか、どのように資料を集めて論文を作成したか、査読結果とどう向き合っていくか等、具体的な論文作成の営みを探る趣旨の下、開催された。

最初に、境氏から保育現場と研究室との乖離が悩みとして挙げられ、その悩みを質的研究方法論によって乗り越え、保育現場と研究室とが往還する研究へと変容していったプロセスが具体的に紹介された。「あいまい性」や「柔軟さ」をもつテラス（境）の場所の特性を明らかにしていくためには、境以外の場所をあいまいでないものにするという境氏の逆転の発想に惹かれ、構造を明らかにするために辿りついたM-GTAという方法論にも興味を抱くことができた。境氏の発表からは、保育現場の現象をどのように言葉に表し、方法論を用いながらその構造を明らかにするのかという学びを得ることができた。

次に発表された中西氏は、論文作成に伴う困難として、研究へのご自身の思いとの「距離感」を率直に語られた。自分の思いと論文との「距離感」について、自分の言いたいことを言うのではなく知りたいことを書くのが研究論文であること、自分の思いや価値から生まれる問題設定は研究の原動力として必要だが、自分の思いが他者からどう見えるのかを常に相対化することが大事であることを語られた。また、言葉と自分との「距離感」の中で、「ミラクルワード」との出会いという話題が挙がった。

自分の研究をわかりやすく説明できるミラクルワードに出会うと、その言葉ですべてを語ろうとしてしまう。しかし、その言葉でしか語れず思考停止を招く危うさもあり、言葉との距離感を意識的にとることが必要との話であった。中西氏の発表からは、自分の思いを大切に保持しながらも、常に他者からの客観的視点を併せ持つことで「距離感」を保つ研究プロセスを学ぶことができた。

最後に宮田氏は、研究の軸となる研究ノートを作成し、迷うと常にノートを見て研究の目的に立ち戻る作業を繰り返すこと、先行研究を丁寧に分析することで、自分の研究方法やテーマが明確になること、自分の論文を査読も含め、多様な人に読んでもらうことで、言葉の置き方や他者からの理解を検討する機会となることを発表された。宮田氏の発表からは、実践で感じた言葉にならない思い、論文に書ききれないものをどのように言葉にしていくか、という宮田氏自身、課題として挙げられた言葉の選択に関心を抱いた。フロアとの協議でも論文に用いる言葉の話題が盛り上がったが、宮田氏が先行研究や多様な他者との対話を手掛かりに、言葉を吟味するプロセスを丁寧に積み重ねていることから得る学びがあった。

3名に共通することは、循環する研究プロセスを経ていることであった。現場と研究室、自分と他者の意識、言葉の選択・吟味等、常に留まることなく多様な視点から見直す循環プロセスを自分なりに生み出しながら研究を進めていきたいと感じることができた。

●Profile

平野 麻衣子（ひらの まいこ）
青山学院大学 教育人間科学研究科 博士後期課程
園の片付けに関心があり、子どもが片付けにおいてどのような学びをしているのかを研究しています。単なる生活習慣としての片付けに留まらない人としての育ちの過程につながる片付けの意義を探究していきたいです。

◆研究集会補助金の交付について◆

研究集会補助金を受けようとする方は、8月末、12月末、3月末までに申請書をご提出ください。
なお申請書は、本学会ホームページ「研究集会補助金の申請」に掲載しております。
ご不明な点等がございましたら、学会事務局までお問い合わせください。

◆各種申請について◆

《変更届について》

氏名・住所・所属先等が変更された場合は、変更前の情報および変更後の情報を明記の上、郵送、FAXまたはMailにて学会事務局までお知らせください。

《退会手続きについて》

本学会を退会される場合は、氏名、連絡先（住所・電話番号）、退会理由、退会希望年月日等を明記の上、郵送、FAXまたはMailにて学会事務局までお知らせください。

※本学会ホームページ「各種手続き」より「変更届」「退会届」をダウンロードすることができます。なお、書式につきましては問いませんので、上記「変更届」「退会届」をご使用いただくなくても構いません。

【送付先】：〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-2 B, Rロジェ T-1
FAX：03-3234-1414 Mail：hoiku@main.so-net.jp